

秋の虫採りによる「保育内容（環境）」学習の試み
ー平和公園のフィールドワークからー

川 崎 勝 彦
今 津 孝次郎

愛知東邦大学

秋の虫採りによる「保育内容（環境）」学習の試み ー平和公園のフィールドワークからー

川崎 勝彦*
今津 孝次郎**

ー目次ー

- I 問題ー「保育内容（環境）」学習へのアプローチ
- II 平和公園のフィールドワーク
- III 採取した虫と幼稚園児
- IV 野外実習による「保育内容（環境）」学習の成果と課題

I 問題ー「保育内容（環境）」学習へのアプローチ

1. 「環境」の捉え方

「保育内容（環境）」が扱う領域は実に幅広く、また奥行きが深い。文部科学省の『幼稚園教育要領解説』（2008年）でも、この領域は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが目的としてあり、以下のような三つのねらいが掲げられている⁽¹⁾。

- ① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- ② 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- ③ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

これら三つのねらいのなかで最も重要なのは、やはり自然環境との触れ合いであり、その楽しみと発見、興味関心と考えを豊かに発達させることであろう。そして、自然環境との触れ合いの核心は言うまでもなく「いのち」と向き合うことである。発見にしても、興味関心や考えにしても、この「いのち」との向き合い方を見落とすことはできない。

以上述べてきたことは、保育者を目指す若い世代にとって第一に学ぶべき学習課題そのものになってくる。なぜなら、若い世代の特徴としては幼い頃からの身近な生活のなかで自然環境との触れ合いが乏しく、いきおい動植物の「いのち」と関わる機会も少なくなっているからである。

* 私立東貴船幼稚園長・愛知東邦大学非常勤講師

** 愛知東邦大学教育学部教授

そこで、「保育内容（環境）」では、幼児に対する教育をどうするかという以前に、学生たち自身が自然環境に身を置きつつ親しみ、触れ合い、興味関心を抱きながら「いのち」を見つめる経験を味わうこと、その経験を通して環境の諸側面と環境を通じた保育のあり方を学ぶことである。こうした経験的学習を抜きにして、幼稚園や保育所で保育者として園児に向き合うことは出来ないはずである。

2. 「環境」学習の意義と方法

「環境」を学ぶ意義と方法としては主に二つを区分できる。一つは㉔大学内教室での知識学習法であり、もう一つは㉕大学内外の野外での諸活動である。後者の㉕については、大学内に小さな林や池などがあればそこでも可能であるし、無ければ大学の外に出て野外活動をおこない、観察をはじめさまざまなフィールドワークを通じた経験学習がある。「いのち」と関わる学習でいえば、後者の㉕野外などでの経験を通じて学ぶ方法がより適切である。そこで、㉕のうち「秋の虫採り」のフィールドワークを大学に隣接する平和公園で実際におこない、アクティブラーニングによる授業実践を試行した。

この授業は幼稚園教諭免許・保育士資格に関する科目「保育内容（環境）」（2年生対象、選択科目、80名）である。半期15回の授業実践とその前半でおこなったフィールドワークの企画と運営は保育のプロフェッショナルである川崎園長が担当した。そして授業実践には参加していないが、授業が進行する各局面で川崎による実践報告を受けながら、アカデミックな立場から今津が論文形式の原案にまとめた。その原案について、授業期間中に4回にわたって両者が討議し、今津がそのつど加筆修正を施してさらに論文草稿を互いに検討し、最終的に両者の意見一致をみて原稿を完成した。したがって、本稿はその全体が文字通り川崎・今津による共同執筆である。保育内容に関する実践研究論文の作成は、プロフェッショナルとアカデミックの二つの立場が協働してこそ可能である。双方の立場を同一者が兼ね備える場合もあるが、きわめて実践的な保育内容の授業ではそれは実際には難しい。それにプロフェッショナルな保育者だからこそ、アカデミックな立場ではできないフィールドワークの独自企画を創造できる強みがある。「環境」学習にあたっては、両者の相異なる役割の特徴を最大限に発揮できるように協働関係を組むことが肝要である。

さて、「秋の虫採り」が「環境」を学ぶうえで意義が大きいと思われるのは以下の3点である。

- ① 虫は子どもが小さいときから身近に接し、興味関心を抱きやすい「いのち」の現物であり、「環境」を理解しやすい対象である。
- ② ただし、かつては暮らしのなかに自然なかたちで虫を見て手で触れる機会が多かったが、今ではその機会が減っているので、授業のなかであえて野外に出て自然に触れることが求められる。
- ③ 夏ならば、林や森の各所の表面に虫を見ることができ、秋には冬を迎える準備として落ち葉のなかに隠れているので、そのなかから探し出す必要がある。つまり秋の虫採りは虫の表面的な生態を知るだけでなく、季節の特徴を見つけ、異なる季節を比較したりすること

ができ、自然に対して関わり、理解を深めていくのに絶好の材料である。

II 平和公園のフィールドワーク

1. フィールドとしての平和公園

平和公園は名古屋市千種区に位置し、戦後復興都市計画により1947年に開園した。名古屋市東部丘陵地帯に147haの面積を有し、市内の多くの墓地が移されるとともに、有数の桜名所としても知られ、南部では自然林も残っている。多くの樹木や植物をはじめ、野鳥、池の魚、昆虫、などと四季折々の様子を楽しみながら自然と触れ合うことができる。そして市動物愛護センターもあるので、「いのち」との触れ合いを核にした環境学習にとって格好のフィールドである。この公園の南東部に隣接する本学からは徒歩10分で公園内に入ることができ、授業時間中に気軽に往復できるという便利な条件に恵まれている。したがって平和公園でのフィールドワークは、本学での「保育内容（環境）」にとっては格好の方法である。

2. フィールドワーク授業展開

「環境」「自然環境」に関する一般的な講義の後で実施されたフィールドワーク（以下「野外実習」または「実習」と略記）の授業は5回にわたって展開された。内訳は準備2回、実習1回、実習の振り返り1回、幼稚園との交流の検討1回から成る。単に実習で虫採りをして終わるのではなく、採った虫を川崎園長が東貴船幼稚園（以下「幼稚園」と略記）へ運び、それを園児による自然とのふれ合いに活かし、その様子を授業で学生に紹介し、その子どもの様子から学生がさらに幼児について学ぶ。つまり、幼稚園での教育実習に匹敵するような取組みも含み込ませている。こうして野外実習と間接的な園児との交流という二重の取組みになっているのが本授業の特徴である。なお、受講生80名が一斉に野外実習に出るのは規模として大きすぎて運営上困難な面がある。この点については最後の「IV 野外実習による『保育内容（環境）』学習の成果と課題」で述べたい。

(1) 準備

a. 自然と虫採りへの動機づけ：昆虫図鑑で各種の虫に関する知識を復習した。虫に関する「生き物クイズ」で楽しみながら興味関心を高めた。また虫を苦手とする学生のために、ムカデとゴキブリのゴム製おもちゃを提供し、あえて触れてもらい、少しでも抵抗を少なくして本番に備えた。全体の4分の1くらいの約20人が虫を苦手と答えた。特に特徴的なのは、苦手な男子学生が多いことである。「生き物クイズ」の一部を挙げると資料1のようである。

b. 実習の準備：80人の受講生が男女混合の8人程度で10班に分かれて、班の名前を話し合いで決めて付けるとともにグループリーダーを選び、リーダーが各班の活動の取りまとめ役となった。必要な道具として虫かご、網、熊手は幼稚園が準備した。また、「生き物採取表」のプリントも作成した（資料2）。

資料1 虫などに関するクイズ（部分）

問 い	答 え
・虫は虫でも食べられる虫は？	茶碗蒸し・蒸しパン
・テントウムシの黒丸の数は？	7つ、他にも数が違うものもある
・セミが鳴くのはどっち？	オス
・ムカデとヤスデの違いは？	ムカデは毒があり刺す、ヤスデはない
・ダンゴムシとワラジムシの違いは？	ダンゴムシは丸くなる、ワラジムシはならない
・ハチが刺すのはオス、メスどっち？	メス
・ダンゴムシのオスは何色？	一般的に黒
・生まれたばかりのキリンの赤ちゃんは何センチくらい？	185cm

（2）実習

当日は授業開始すぐに全員で平和公園へ徒歩で行き、班ごとに道具を使って活動を開始した。学生たちは恐る恐る落ち葉をめくりながら虫を見つけるものの、最初は「わあー」「きゃー」と騒ぐだけでなかなか採取するに至らない。時間がかかったが、少しずつ虫たちに興味関心を持ち始め、網や素手で採取し始めた。対照的に虫が苦手な者やあまり関心がない者はただ歩いているだけの姿も見られた。虫を採取するだけでなく、キノコやドングリ、落ち葉なども集めて虫かごに入れて大学に持ち帰った。教室では虫だけでなく植物の種類や名前も調べた。そして、虫かごの虫たちを見ながら虫の形や色、臭いをかいでみたりする者も出てきた。「意外とかわいい」と発言する者もいた。

各班で「生き物採取表」に記入したが、そのうちの1枚では7点の虫と植物が挙げられ、それぞれの簡単なイラストも添えられている。虫として「クモ、ハサミムシ、ミミズ、カタツムリ、セミの抜け殻」、植物として「ドングリ、キノコ」である。

（3）実習の振り返り

学生が実習を振り返って綴った率直なレポートからは、野外実習がたいへん効果的であったことや、苦手な虫に触れられなかったこと、それでも少しは馴染んできた様子などを伺うことができる。レポートから一部を抜き出そう。

- 「平和公園はとても広く素晴らしい環境で、たくさんの虫や植物を観察することができました。大学生になってから公園に行く機会が少なくなり、自然環境を体験する機会がなくなっているの、実習はありがたいです。」
- 「実習では講義では学べない雰囲気を感じ取ることができた貴重な経験でした、自ら虫採りをする事で、子どもの気持ちを考えることができたし、子どもが虫採りをする際に気をつけるべきことを詳細に理解できました。」

資料2 生き物採取表（様式）

《生き物採取表》			
グループ名			
学籍番号	名 前	学籍番号	名 前
【採取した生き物】			
○		○	
○		○	
○		○	

- 「落ち葉や土のなかにたくさんの虫がいて、見たこともない虫や、変な色をした虫などがいて気持ち悪かった。それでも皆で探しに行ったことは楽しかった。」
- 「私は虫が苦手ですが、皆で協力して探すことの楽しさや、見つけたときのワクワク感が忘れられません。虫以外にも木の実や枝など、自然に触れながら探すことができました。土の冷たさや重なった葉っぱの生暖かさ、匂いなど視角だけでなく、触角、嗅覚などでも感じる事が出来て、楽しく学べたと思います。」

（4）学生による虫採りの実態

以上のようなレポートに示されている内容以外に、学生の実態について補足しておきたい。

虫に対する学生の態度で言えば、80人と受講学生が多いので、一方で強い興味関心を持つ者がいれば他方ではまったく興味関心を示さない者もいて関心の度合いの違いが大きい。また、虫が苦手な男子学生がいる一方では、大きなミミズを素手で捕らえる女子学生もいる。どのように虫を探せばいいのか戸惑う学生がいれば、すぐさま虫の世界に飛び込む学生もいて、珍しい虫を捕らえては大声で「何だ、この虫は!？」と興奮する者もいる。このように虫の好き嫌いも多様である。

ただ、概して予想以上に虫が苦手な学生が多い。子ども時代から虫と遊んだ経験が乏しいせいであろうが、都市化が進んで周辺に自然環境が少なくなると共に外遊びが減った若い世代の特徴

として把握しておかないと、「保育（環境）」学習だけでなく、保育者養成が中途半端に終わる危惧を感じる。虫に触れたことがない学生に対しては、ゴム製おもちゃの虫を使って事前準備したところ、セミの抜け殻に触れるまでになる効果があった。今の若い学生に対しては、こうしたきめ細かな配慮が不可欠である。

このように、グループリーダーを中心に少しずつ大方の学生が興味関心を持ちはじめ、時間が経つに従って虫探しを楽しむ雰囲気生まれていった。初めは気持ち悪がる者や拒否する者がいたものの、実際に虫たちを捕まえ近くで観察することで「かわいい」、「こんな形なんだあ」などと全体としては多少なりとも興味や関心を持つようになってきた。

また、採取した虫とその知識で言えば、多くの学生がダンゴムシ、ミミズ、クモといったよく見かける虫は知っているものの、ハサミムシやゲジゲジなど初めて見る虫も発見し、実地に知識を増やしていった。ムカデやハチなど毒をもつ危険な虫がいることも理解していた。実際に捕らえた虫や採取した植物などを昆虫図鑑や写真を見て、名前や形・色など、より細かいことを知ることができた。そして皆が捕えた虫を幼稚園に持ち帰って園児が観察することを伝えると、「クモなんか怖がるんじゃないだろうか」と心配する声も出た。

Ⅲ 採取した虫と幼稚園児

1. 幼稚園の「環境」構成

さて、学生が採取した虫が運び込まれた幼稚園での虫をめぐる自然環境の日常の様子についてまとめておきたい。園庭の奥には桜の木やその他の木々があり、秋には落ち葉が集まって虫が隠れるようになり、格好の自然観察材料となるし、落ち葉は造形制作の材料ともなる。虫たちに園児は日頃から興味や関心を持ち、アリやダンゴムシなどの小さな虫たちが子どもたちの遊び相手になっている。簡単に足で踏みつけたりする場合には、「いのち」の大切さを感じるために見逃さずに注意する。また捕まえる楽しみを味わう一方では逃してあげることの大切さを学ぶことも日頃から配慮されている。そして、たまにハチなどが室内に入ってきたとき、保育者の対処行動が園児に影響を与えることを考慮して、あわてずに冷静に対応するとともに、虫のなかには毒を持っていることもあり、攻撃されることのないように身を安全に保つことも教えるように保育者全員で心がけるようにしている。

幼稚園ではこれまでも室内でイモリを水槽で飼ったことがあり、カタツムリやゲンゴロウ、アオムシなどを虫カゴで飼ったこともある。一方、園庭ではプランターでイチゴや一口トマトなどを育てて実を食べて食育に供したこともある。そして園外保育では園バスに乗って近くの池や緑地に出かけ、自然環境のなかで過ごす行事もしばしばおこなわれており、幼稚園としては可能な限り園児が自然環境を身近に感じられるように環境構成をおこなっている。



写真 1



写真 2

写真 1・2 幼稚園で飼育されるカタツムリとクモを見つめる園児

2. 園児の虫に対する態度

学生が採取した虫や植物が入ったカゴを幼稚園の玄関に置くと、園児たちはさまざまな反応を見せた(写真1・2)。「大学生のお兄さんお姉さんがみんなのためにいろんな虫を捕まえてくれたんだよ」と伝えると、子どもたちは「すごい!」と感心した。園児各自が持っている昆虫図鑑を片手に「わー!」と言いながら、写真と見比べて名前などを調べていた。園児が怖がるのではと学生が心配していたジョロウグモであるが、幼稚園ではあまり見かけないだけにとても興味を示し、恐そうに感じながらも、「さわってみたいなあ」と言う子もいた。こうして、それまで知らなかった虫の名前を知ることができた。その後は昆虫図鑑を園庭に持ち出す回数も増え、女子も男子顔負けになるくらいに虫探しに奮闘するようになった。

このように、一週間にわたって虫たちを観察した後、特に親しみを感じたカタツムリ以外の虫たちは園庭に逃がした。死んでしまった虫もいたため、子どもたちに「いのち」の話をして土に埋めて供養した。カタツムリ2匹は子どもたちが「カタツムリちゃんとイチゴちゃん」と名付け、部屋で飼うことにした。「カタツムリはなにを食べているのかな?」などの質問も出ていて、園児の関わりが続いている。

3. 学生の園児理解

地理的にも時間的にも受講学生の多さからしても、学生が直接幼稚園を訪問して園児たちの様子を見ることはできないので、園児と虫たちの触れ合いを写真に撮って、授業中にそれらの写真を学生に見せて説明した。虫と関わる園児の姿に、学生たちからは「すごいねぇ」、「かわいい」、「がんばって採取して良かった」「役だってうれしい!」といった声が聞かされた。おおきなミミズを捕えた女子学生は、園児たちの驚きの表情に喜びの感情を笑顔で表した。幼稚園での幼児の姿を報告する授業では、学生は野外実習時とは違って、保育者としての姿勢を取り始めている。写真で園児と虫の様子を見た学生の率直な感想の一部をレポートから拾ってみよう。

- 「自分たちが捕らえた虫を園児たちが興味を持って見ていることを知り、不思議な気分です。子どもたちが名前をつけて愛情を込めて育ててくれているんだなと思うと、すごく嬉しいです。」
- 「今の私たちは虫を気持ち悪いとつい思ってしまうこともありますが、小さい子どもたちにとっては、虫を見つけると喜び楽しんでいるなど感じます。」
- 「子どもは本当に何事にも積極的になるために、大きな虫も小さな虫も、堅い虫もふにゃふ

にやした虫も全部に興味津津さを示すので、すごいと思います。怖いもの知らずで、見習いたいと思いました。』

- 「虫を触れない子も苦手な子もいるだろうが、カゴに入っていれば観察することができ、虫について興味関心を持ってきているように感じた。虫を育てることによって、虫が何を食べて生きているのかを知り、命の大切さについても学べるから、園児たちにとってはとてもいい教材だと思う。」

こうして、園児に虫や植物を提供することによって、園児の反応を知ることができた。平和公園での実習で抱いた虫への興味関心と新たな知識が、それだけに止まらずに、実際の幼稚園の場での園児を前にした興味関心そして知識へとさらに発展していくことができた。学生たちは自分の虫採りの様子と、園児が虫にどう関わるかの姿を比較しながら、子どもとはどんな存在であるかを理解し始めている。それこそ「保育内容（環境）」に相応しい学習であると言えよう。

虫採りの野外実習で、虫の苦手な学生も少しは慣れてくるだろうが、どうしても虫に触れることができない場合もあるかもしれない。それでも保育者にとって大事なことは、虫に対する保育者の態度を周囲の園児が見聞きしていて、その態度から影響を受けるということを意識しているかどうか、である。保育者が虫に驚いて嫌悪的な態度を示せば、園児も虫に対して消極的な態度を身に付けていくことが予想される。それだけに、たとえ保育者が虫に触れられなくても、子どもが興味関心を育んでいけるように、「よく見るとかわいいね」とか「色がおもしろいね」、「子どもだろうか、大人だろうか?」、「何を食べているんだろう?」といった興味津津の気持ちを感じさせるような楽しい声かけをすることは可能である。少なくとも、そうした構え方を学んで身に付けることも野外実習の達成目標である。

IV 野外実習による「保育内容（環境）」学習の成果と課題

1. 野外実習と受講生の規模など

今回の野外実習の試みでは、受講生80名が一斉に平和公園に出かけたが、規模としては大きすぎ、半分の40名が理想的である。小規模であるほど、自然環境の詳細な説明や虫採りの細かな指導が可能だからである。また学生の集中性も高まり、虫を苦手とする者も苦手でない者から影響を受けて虫採りに挑戦し易くなるだろうからである。

そこで、80名の受講生ならば、40名ずつの2グループに分けて、1グループずつが野外実習に出かける形態も考えられる。最初のグループが出かけた後、他のグループは教室で自然環境や虫そして生き物全体に関するレポート作成に当たる。残りのグループが出かけた後は、野外実習経験グループは「生き物採取表」や虫採りの振り返りなどのレポート作成に当たる、というような方法を取ることもできよう。それこそティーチングアシスタントがいれば簡単に実施できる方法である。野外実習経験者が次年度の後輩の実習に「サービス・ラーニング」として参画するかたちでティーチングアシスタント役を務めることも考えられる⁽²⁾。

さらに、授業前半での野外実習に加えて、授業後半で再度の野外実習ができれば、学生たちの

虫採り経験も異なってくるかもしれない。虫に対する興味関心や好き嫌いの度合いをはじめ、自然環境や「いのち」に対する態度形成、あるいは班での共同体制がどう変化するかなど、前後2回の野外実習を実施すれば学習過程を検証する貴重な資料が得られるだろう。

2. 「保育内容（環境）」と「いのち」の学習

一般的に言って「保育内容（環境）」の学習目標の一つとして「自然のサイクルや法則に気づく」という大きなテーマが含まれる⁽³⁾。自然環境に触れながら何に気づき、何を考えるかというときのもっともレベルが高いテーマである。毎日の登園降園の途中でさえ、季節による自然変化を感じ取るのが園児である。大人が想像する以上に視覚・聴覚・嗅覚などを通して、自然環境に意識が向かう園児に対して、自然のサイクルや法則性の一端を感じることは、小学校教育への導入ともなるだろう。そうした高いレベルの感性を育むには、保育者自身がそのテーマについて自分自身の感性を高めておく必要がある。園児といかに関わるかよりも前に、自分が自然環境とどう関わるかという基本的な課題である。この課題にとっても今回の野外実習の意義はきわめて大きい。「保育内容（環境）」として、学生がその領域での学習の入口に立つことができたアクティブラーニングの視点による授業であったと評価できる。そして野外実習法の重要性を再確認できたと言ってよい。

とはいえ、実際に虫に触れ、虫の名前を覚えるだけでは「環境」学習としては底の浅いものに止まってしまう。特に自然環境を学ぶうえで中核となるのはやはり「いのち」について感じ知り考えるという課題だからである。「生まれる」ことがあれば「死ぬ」ことがある「いのち」のプロセスに、真正面から向き合うことが重要である。

授業では、学生たちが小さい頃から身近に育てたはずの草花や、飼っていた虫や魚、あるいはペットについて、その誕生と死の経験を改めて振りかえってもらうことを求めた。単にかわいいだけでなく、朽ち果てる、あるいは亡くなる場面にどう向き合ったか、を思い出してもらい、少しでも「いのち」を考えるきっかけを作りだそうとした。つまり、虫採りの野外実習はそれだけで終わらず、学生と生き物との触れ合いの振りかえりにまで広がっていく契機となる取組みなのである。

幼稚園では園庭にいるアリやダンゴムシなどを園児がつい踏みつけたり、手で潰したりすることがあるが、それを見逃さずに、そうした行為について「いのち」の観点から考えさせるようにしている。このように自然環境に触れるなかで「いのち」を見つめることは、ごく身近なところでいくらかでも機会がある。その機会をすかさず生かすか、あるいは見逃してしまうかの違いである。要はそのつど丁寧に声かけをしていくことが大切であり、学生にもそうした幼稚園での日常を伝えることが「保育内容（環境）」授業の内容をさらに実践的で奥深いものにする。

今回の野外実習では、採取した虫や植物を幼稚園に提供して、園児たちが虫カゴで飼育して観察した。同時に大学生も学内の適当な場で飼育して観察を続け、園児たちの様子と比較したらどうだろうか。一時的な野外実習経験に終わらせずに、「いのち」と長期的に向き合う大学内での場を創り出すことができたなら、自然に触れ合う機会が乏しくなっている現代の学生たちにとって

実地学習をさらに発展させていくことができるのではないかと考えられる。園児たちとの比較検討ができれば、「保育内容（環境）」学習をいっそう発展させていくことができるのではないかと考えられる。

3. さまざまな「環境」との関わり

今回の野外実習は「自然環境」に着目した試みであったが、「環境」としてはその他さまざまな場面がある。幼稚園の各部屋や敷地全体、さらに近辺の道路や公園、建物などもすべて環境を構成している。園児が毎日通っているところでごく普通に見て、何かを感じている環境である。交通事故や子どもの連れ去りなど、痛ましい事故や事件の発生が増えているだけに、地域環境の特徴や注意すべきことを園児が学ぶことも極めて大切である。

特に幼稚園では近隣の施設訪問にも力を入れている。近くに消防署があるので毎年のように園児は見学に行く。おもちゃのミニカーで知ってはいても、真っ赤な消防自動車を真近で見る経験はなかっただけに園児は大はしゃぎとなる。ボーリング場からも招待されることがあるが、娯楽施設やショッピングセンター、デパートなども保護者と一緒に行く機会があるから、環境としての意義や特徴、注意点などについて園児なりに知っておくことも重要な課題となる。

以上のように、地域社会全体を環境と捉えるならば、学生も行き来する地域の諸場面で見かける幼児の様子を日頃から観察して、子どもの目線から見た地域について再確認することも「保育内容（環境）」にとって大切な課題になるだろう。あるいは、幼稚園児が消防署を見学する際に、学生がボランティアとして参加して、園児の言動をつぶさに参観する機会をもつことができればなお望ましい。大学と幼稚園との交流をもっと盛んにすべきだという教訓を得たのも、今回の野外実習を通じた「保育内容（環境）」の授業から得た成果である。

【注】

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年、120頁。
- (2) 「サービス・ラーニング」については、今津孝次郎「教員養成における『大学中心』と『学校現場中心』－『サービス・ラーニング』と『学校インターンシップ』－」『東邦学誌』第45巻第1号、2016年6月、および今津孝次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚「〔実践報告〕教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の試み」『東邦学誌』第44巻第1号、2015年6月、を参照。
- (3) 柴崎正行・若月芳浩編『保育内容「環境」』ミネルヴァ書房、2009年、48～50頁。

受理日 平成29年3月13日